
怪盗快音が本当の事を口にしたとき

たけま

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

【コード】

N8887D

【作者名】

たけま

【あらすじ】

初めての連載です。おかしなてんがある場合感想の場を借りておしやて下さい。

第1話快音が本当の事を口にしたとき（前書き）

初めての出会いをお読み下さい。

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

第1話快音が本当の事を口にしたとき

快音としての予告状を警視庁におくり私はあるビルの屋上にいる。

「今回も怪盗としか書いて無いけど警部は見破れるかな？」ちなみに今日の狙いはブルーサファイアです。

「まあ行くか」

「居たぞ、奴だ怪盗キッドを捕まえろ。」いつもと違うふいんきにすぐに対応した。

「バレバレですよ。警部私がキッドでは無い事ご存じでしょう？」

「う…」

「何故なら、今日の夜中12時にキッドが現われるから早めに終わらしたいのでしょうか？」「まあ、心配無用ですよブルーサファイアはもう既に私の手の中に…」

「バカなちゃんと検査した筈だ。」

「櫻井探偵の姿を貸して貰ったんですけど…元から似てるからばれて無かった見たいですね。」

「ところで、警部お時間は大丈夫ですか？」

「あぁー！うるさー！！」

「今、11時ですよ。」

「くっそ次こそ」よし帰ったやっぱりパンドラではないのでお返しする

「さあ観客として行くか。」キッドは狙いの宝石を盗みあるビルの屋上に降り立った、そのとき黒ずくめの奴が5人出て来た！！

「これは貴方が求める宝石ではないですよ。」

「じゃ、死んで貰う…」5つの銃口がキッドに向く私はトランプ銃を出し犯人に向けて2発打つ屋上に降り立ち3人を閃光のなかで素早く気絶させ敵は2人に減った、

「なんで此所に居る。」

「キッド素が出てるよ。」

「あ、」

「黒ずくめの下っ端君ボスのジーンに言っついてパンドラは世界中何処を探しても見つからないとね…」キッドの方に振り返ると

「どうゆう事だよすれ…」

「違う所で教えてあげる。此所から逃げるわよ香凛の声で警察に電話したし。」私達はとある倉庫に来ていた。

「えっとまずなにから聞きたい？」

「パンドラの事だ…」

「OK…まず私はある人からパンドラの本当のありかとどうやって不老不死の薬にするかを…これでOK？」

「次に、ある人について」

「ある人とは貴方の父親黒羽盗一さんよ…黒羽快斗君？」

「なんで、」

「だから、キッドが教えてくれたの」

「それぐらい分かる、何故お前が親父を知ってるか聞きたいんだ」

「ああー私ね盗一さんが殺される瞬間見ちゃたの…助けられなかった、私が盗一さんに近寄るとさっきの事を教えてくれたの…本当に…ごめんなさい…私が…私が…殺したも同然ね」私は涙で顔がクシヤクシヤになりそうだった。「次に何故お前が組織を知っているか…」盗一さんのことに触れずに次に行くキッド

「私は一時海原七海として黒ずくめの一員だったより多くのパンドラの情報を得るためにね。そしてそこで、あのお方と出会いコナン君の正体を知った。」

「お前バカか」

「賢いのが良いわけじゃないでしょ？」

「この事はそのときがくるまでお互い黙っている事？分かった？」

「ああ、探偵君にも言わねえよ」そのときがくるのはそう遠く無い事を知ってるのは、作戦を建ててるあの人だけ…

そんな事私達を知る筈も無い。「次に何故お前が組織を知っているか…」盗一さんのことに触れずに次に行くキッド

「私は一時海原七海として黒ずくめの一員だったより多くのパンドラの情報を得るためにね。そしてそこで、あのお方と出会いコナン君の正体を知った。」

「お前バカか」

「賢いのが良いわけじゃないでしょ？」

「この事はそのときがくるまでお互い黙っている事？分かった？」

「ああ、探偵君にも言わねえよ」「そのときがくるのはそう遠く無い事を知ってるのは、作戦を建ててるあの人だけ…
そんな事私達を知る筈も無い。」

(END)

第1話快音が本当の事を口にしたとき（後書き）

快斗（以下快）「何故かこの場に呼ばれた快斗と」快音（以下音）
「快音です」快「なんで、俺にずっと黙ってたんだよ。」音「ほ
ら盗一さんにその時がくるまでお互い黙っているてっ約束したし、
教えたら快斗シヨック受けるでしょ？…それにまだまだ続くよこの
秘密」快「言えよ…」音「今此所で言ったら読者さんに怒れるよ。」
では、2話でまた会いましょう。

手を組む怪盗と探偵（前書き）

後書きには快斗と快音が出ていること気付きました。

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

手を組む怪盗と探偵

私は黒羽邸に向って走っている何故なら組織の情報が紫稜から入ったからだ（ピーポーン…ガチャ）

「あの櫻井香凜ですけど…ハアハア快斗君居ますか？」

「居るけど…」

「良かった…快斗君が事件に関係あるかも知れません。ハアハア…工藤君に似た人が居たてつ聞いたのでもしかしてと思い快斗君にお聞きしたいのですがかまいませんか？」

「ええ、快斗ー香凜さんが手伝って欲しいらしいわよー」

「ああーすぐ行くから待っててくれ。」数分後

「待たせな」

「では、少し快斗君を貸して貰います。」

「んで、本当は何なんだよ、」

「組織のアジトが掴めたの」

「だから、探偵事務処に言ってるのね」

「うん」（コンコン）

「はい」

「あ、蘭さんコナン君居ます？」

「香凜ちゃんに快斗君どうしたの」

「コナン君と公園に行く約束したんだけど…」

「僕は此所だよ香凜姉ちゃんに快斗兄ちゃん…」

「あつ、コナン君」

「じゃあ、行くぞ」

「あー快斗」

「蘭さん昼には帰ってきます。」

「じゃーねー蘭姉ちゃん」公園に到着

「んで、何なんだよ2人して」

「まあまあ博士家に行ってから」博士家についたら

「遅いわー快斗に工藤に香凛」

「すまんなー平次君快斗の母さん説得するのに時間掛かってん。」

「なんで服部が居るんだー」

「おいボウズ早くこい」

「まず、仮定のために私達の自己紹介をするね。…まず私から…私の正体は…」快音の格好をする

「怪盗快音よ」快斗はキッドに変わる

「怪盗キッドだ」元に戻り

「分かった？」二人は啞然として居る

「今日此所に来たのは組織のアジトについての情報が掴めたから」

「ほ、ほんまかいなー」コナン君は探偵モードに

「だから手を組んで欲しいんです。本当の事はそのときが来たら教えるから」

手を組む怪盗と探偵（後書き）

快「次になってんじゃんしかも正体ばらしてるし」音「後々関係してくるのよ」快「本当か？」音「作者のたけま先生が言ってたよ。」
快音「まあ、感想アドバイス御待ちして居ます。」

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

第3話パンドラが現われた

「手を組むだと?」

「はい、貴方方の推理力と私達の変装術を使ってね」
「嫌だね。」

「まあ、話を最後まで聞いて」快斗が後をつぐ

「まず、俺らが組織に潜入する。そして、アポトシキンの情報を得る。」

「そして、ボスの所に行く」

「…分かったよでも、櫻井香凜と黒羽快斗としてだ。」

「くれぐれも無理すんなよ。」

「ほんまやで」

「ええ、探偵バツチを着けて置くわ」

「ほんなら、作戦開始やな」

「ええ」

「ああ」

「そだな」抗して、探偵と怪盗は手を組む事に成功した。「コナン君はFBIに連絡して協力して貰うようにお願いして下さい。」

「ああ」

「平次君はFBIと協力して私達の情報を正確に聞きまとめて、それを、コナン君に送る。」

「なんや、俺だけのけもんかいな。…そんなことゆるさへんで!!」

「貴方は、黒に染まっては駄目なの…」私と快斗がはもる。

「だから、貴方に協力をして貰いたく無かったんだけど…快斗が居た方が良いてっ言うから…頼んだの…」

「あー分かったわ涙目になるな。」

「じゃ、最後の大勝負の始まりだ」3日後快斗と私は二人に隠して怪盗キッドと快音としてアジトの屋上に降り立った。

「さあ…シヨ一の始まりね」

「ショーはやめる。」

「ごめん出来るだけキッドに化けてる事あの二人にはれないようにね。」

「分かって居ますよお嬢さん…」「じゃ、行くわよ。」「何故怪盗の格好で行くかって？快斗がキッドとして盗一さんの敵を打ちたいって言うから…私も快音として盗一さんの敵打ちを手伝って上げたいなって思ってるね。」

「早くこい」

「うん」よいよ組織との対決の始まり…私達は気配を消し地下に向う
「此所まで誰も出て来ないのは、おかしいわ…まさか…もう気付いているんじゃない…平次君組織は動いてる？」

「まだや、うんともすんともいわへんは…」

「そう今地下についたわ分かりしだいままた連絡する。」快斗と別れて部屋を探す。

「ん…アポトシキンあった…平次君」

「なんや…」

「あつたわ薬の情報とアポトシキンの完成版が…」

「ほんまかいな」

「声大きい」

「すまん」

「鳩に持って行かすから」

「快斗」

「んだよ」

「さあ、ボスの所に行くわよ」

「あつたのか薬？」

「ええ、あ、確か此所がボスのへや」(コンコン)

「海原七海です。」

「入りなさい」(ガチャ)

「さあてとまず快斗無線を切って」

「ああ」私も探偵バッチのスイッチを切る

「さあ、こちらに向いて下さい…」その頃平次達は
「くっそ、通信が切れよった。」
「なんだと…服部…探偵バッチの電波を探してくれ。」
「ああーあったで、工藤、香凜のバッチの電波が…」
「その情報この眼鏡に送れるか？」
「10分ぐらい掛かるけどできるで、」
「頼んだ」一方、香凜達は
「黒の組織の黒幕さん工藤優作さんと櫻井紫綾さん？」快斗は我を
失いそうになりながら、私に聞く
「どう言う事だよ。快音…」
「黒幕は…私達の…身じかに居た…のよ…。」
「さあ…紫綾さんと優作さん屋上で話をしましょう。」
「じゃあ、いくかね。」屋上についたころコナン君達はと言うと
「出来たで、工藤ー」
「おいあいつら、屋上にいる。」
「はあ？まあええわはよ行くで…」
「ああ」屋上の私達は
「まず私の正体から快斗は言わないで良いよ…これは…私の問題だ
から…」私は快音から香凜に戻り続ける
「父さんがボスだったなんて信じられ無いよ…」
「香凜…お前が快音だったなんて…」(ガチャ)
「コナン君来や駄目ーそれ以上扉を開けると言うなら私は貴方の敵
になつてしまう」
「分かったよ此所で待つてるその代わり服部は良いだろう？」
「ええ、」(キイー)
「なんで、あんたが此所におんねんや…」
「この人達が」快斗が代わり言ってくれた
「黒の組織の黒幕だ」
「う、嘘や信じひんぞ。」
「平次君…昔新一君に言われてたじゃない…不可能物を除外して行

「つて余った物がどれだけ信じられなくても…それが…真実だ…てっ
「そやけどなんで香凛は驚いて無いねんな…」

「私はスパイとして一時黒の組織の仲間だった、その時全てを知っ
てしまった。そして、この事はその時がくるまでお互い黙っている
事にして私を組織から逃がしてくれた」

「まさか、君がああ海原七海だったなんてね」優作さんが口をひら
いた後ろから扉が開く音が聞こえる

「んで…なんで、父さんが此所にいるんだよ…」

「新一君貴方にはもうひとつ裏切りがあります。…コードネームシ
ヤクソン…」私は平次君の方に向き

「服…部…平…次」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ」私は震えているコナンを抱き抱え快斗に近付
いて組織の方に向きこ言った

「パンドラはね世界中何処を探しても見つからない。何故なら、パ
ンドラは此所にあるから」と言っ私は胸を指さす、

「心かいなそんなの這ったりやる」と言っ木刀を構えた平次君が
掛かってくる、出来るだけトランプ銃は使いたく無いと思っている
と快斗がどこから出したか分からないスピードで木刀をくるた。

「ふん、武器を持つて一緒や」私は攻撃を避ける

「ちっ、うわかまる見たいなやちなあ。」

「遅いてっ平次君上や上」と言っ死なない程度に軽く気絶させる

「ごめんねちよとだけ寝て下さい。」

「さあ、パンドラを出して貰おうか？こいつの命が奪われたく無か
つたらな。」

「コナン君」快斗は？周りを見渡すと快斗は眠らせている。5つの
銃口がコナン君に向く

「分かりました。ですが、不老不死の薬にするためにどうすればよ
いかは私は知りませんよ」私は呪文を唱える

「ある人の心にある禁断の箱開かれし時ある人は記憶を失うである
う。…開けある人の心にある禁断の箱！！」すると私の胸からパン

ドラが出て来た

「禁断の箱薬にするときある人の涙が必要となるしかし、禁断の箱薬にする前に心に戻したときある人記憶はうしわれないだろう。ある人の記憶戻らんときは、白き仲間が救ってくれるであろう。…開け禁断の箱!」

「やったぞ、」私は意識が朦朧するなか快斗に近付いて耳元で呟いた。

「その…涙…とは…私の…涙…よ…忘れないで…よ…」パタン

「香凜…香凜…」ふと目が覚めると「目が覚めたか？」

「あのすみません…貴方は私の知り合いですか？」

「ああー自己紹介といくか。俺は江戸川コナン探偵さ。そして俺は高校生探偵工藤新一だ」

「俺が黒羽快斗でありあるもうひとつの顔の持ち主だ」

「俺が服部平次探偵や」

「う…」

「…どうした？」

「思い出した…貴方達が誰なのかめパンドラを不老不死の薬にするためにはどうすればよいかも…そして組織のことも…」

「取り返さないとすぐにまた忘れてしまうわパンドラを取り返さない」と…」

「…じゃあ、行くか？」

「ええ、もう泣いてはならないね。」

第3話パンドラが現われた（後書き）

快「まさか、探偵君のお父さんと香凛のお父さんが黒幕だったなんて……」音「信じられ無いでしょ。」快「いくら何でも此所まで身じかにいるなんてな……」音「次で終わるかなあ？てつたけま先生が言っただけだ……」快「大丈夫か？たけまのやつ……」たけま「快斗（怒）人を信用しなさい。」たけま「あつ、読者の皆様こんにちわ……作者のたけまです。まだまだ文章力がないので不明な点が多いと思います。その時はアドバイス御待ちします。」快、音、たけま「……」

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

#白き仲間登場(前書き)

最終話です。

#白き仲間登場

私達は二人（コナン君と平次君）に黙って、あと、もうひとつあの3人には、黙っているが（コナン君と快斗と平次君）パンドラが心に無い状態で思い出すと、体にすごい影響がある事、アジトに来て居る。屋上の扉を私が開ける

「また、誰も出て来ないな…」

「まさか、もう、逃げたんじゃ…」

「取り敢えず、地下に向うぞ」そうね…迷ってばかりじゃ…変われないもんね。

「ええ、そうね。」ボスの部屋の扉を開ける

「誰だね？」

「快音です。パンドラを返して下さい。」

「そうか、では、屋上に行くかね？」快斗が言う

「さあて、パンドラを返して貰おうか？」だが、紫陵さんと優作さんが反論する。

「それは、無理な相談だ。」私が、紫陵さんに聞く

「なんで、ですか？パンドラが不老不死の薬に出来ないなら、貴方達には、必要な物でしょ？」紫陵さんは、ちよと間起き私に聞く

「誰かの涙が必要になるんだろう？」私は、黙って、うなずく、

「誰の涙かは、調べたら、出て来たんだよ…君の涙だと、言う事がね。」と、優作さんが言う。

「えー！と言いたいけど、普通は、ばれるわね。」「でも、何があっても、私はそれを、受け止める、だから、私は…泣かないと誓うわ…黒羽盗一の名にかけて。」

「ホー、そいつの命もかける事ができるか？」紫陵の指が快斗をさす。

「ええ、この人とあと1人の命は、私が命を懸けても守ります。」次の瞬間、優作さんの手から、閃光弾が投げられる。

「く…」

「快斗！！」閃光が消えた時、快斗がいつの間にか捕らえている。

「こいつの命が奪われたく無かったら、泣くんだな。」

「くっそ、私のせいで、快斗の命を奪う事だけは、私が、許さない。」

「快音、何があっても、絶対に泣くな…」快斗が言う。すると、快斗は、下っ端数人に殴られている。

「やめて…」

「聞こえんぞ、降参か？」

「やめなさいてっ言ってるの、」私は下っ端を倒しながら、続けて言う

「私は、貴方達見たいな、負け犬だけには、なりたくない。」

「あんた達だけは、絶対に…許さない…」私の体は限界に近づいていた。

「私達を、君一人で、倒すと言うのかね？」その時屋上の扉が開いた。

「快音は一人じゃないさ、仲間がたくさん居る。」

「コナン君と平次君それに、FBIの皆さん」

「銃を捨てて、パンドラを返して貰おうか？」と秀一さんが言う。

「悪いが、パンドラは、返せんよ。」

「白き仲間が救ってくれるであろう。」コナン君が言う

「く…」私は、その場に座り込む。

「どうした？快音」

「聞いてないのか？パンドラが心に無い状態で思い出すと、体にすごい影響があると…」

「んだと、本当かそれは、」私は、ジョディ先生の肩借りて立つ。

「私は…約束した…何があっても…それを受け止めると…」

「まだそんな事を言ってるのか？所詮人間最後には裏切られるのさ」と紫稜が言う

「そんな事無い…仲間を信じる事…それを忘れなければ、仲間は…」

裏切ったりしない。」すると、優作の銃口がコナン君に向く私はコナン君の前に立つ

「退かんと、撃つぞ、」

「さつき…言ったでしょ？キッドとあと1人の命は私が…守ると…」

「快音…」とコナン君が言う

「許さない…貴方達だけは…」私はトランプ銃を優作さんに向ける。

「ホー、私と闘うのかね？」次の瞬間2発の銃声が聞こえる。

「な、何？」と言って右腕を押さえる優作さん

「快音なんで避けなかつたんだ。」運良く優作の弾は、私の左腕をかすっただけですんだ。

「だって、私が避けたらキッドに当たってたし。」その時キッドが止血をしながら、優作さんに言う

「黒い弾丸は、銀の弾丸には勝てなかつたと言う事だな。」すると、何処からかパンドラが飛んできた

「はよしまえや快音…俺の気が変わる前に」

「平次君」

「服部…」

「ホー裏切り者が…」一発の銃声…私は、咄嗟に平次君を押す。

「平次君大丈夫？ごめん強く、押しすぎたね。」

「俺は大丈夫や、お前、弾当たってないんか？」

「うん、間髪避けたから…」

「裏切り者を庇うとは…」

「貴方達にとつては、裏切り者…かもしれない…だけど…私にとつて平次君も大切な仲間だから…」

「香凛…俺はお前の事一回裏切ったんやで…」

「それでも、仲間には、違くないでしょ？」

「君には、負けたよパンドラを早く心の中に入れてなさい…」優作はため息をしながら言った

「優作さん…」私はパンドラを胸に当て言う

「元に戻り閉まれ禁断の箱」パンドラは私の胸に戻って行く。

「く…」私が倒れそうになったのを快斗が止める。そのまま、快斗の肩を借りて、言う
「貴方は黒にはなりきれなかった。」優作と紫稜はため息をつきこ
う言った

「黒は白き仲間には、勝てなかったみたいだ。」その後黒の組織は
滅亡し、コナン君は、新一に戻り蘭さんと結婚した。
「全て謎は解けた。」

(END)

#白き仲間登場(後書き)

快「やっと終わったな!!」音「もう、快斗と一緒に怪盗出来ないんだね。(泣)」「快「ああ、泣くな…まだやめると決めた訳じゃないんだ。」「音「どう言う事?」「快「ほらまだオメエと怪盗やってもいいかなあて思ってる」

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8887d/>

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

2009年6月23日00時37分発行